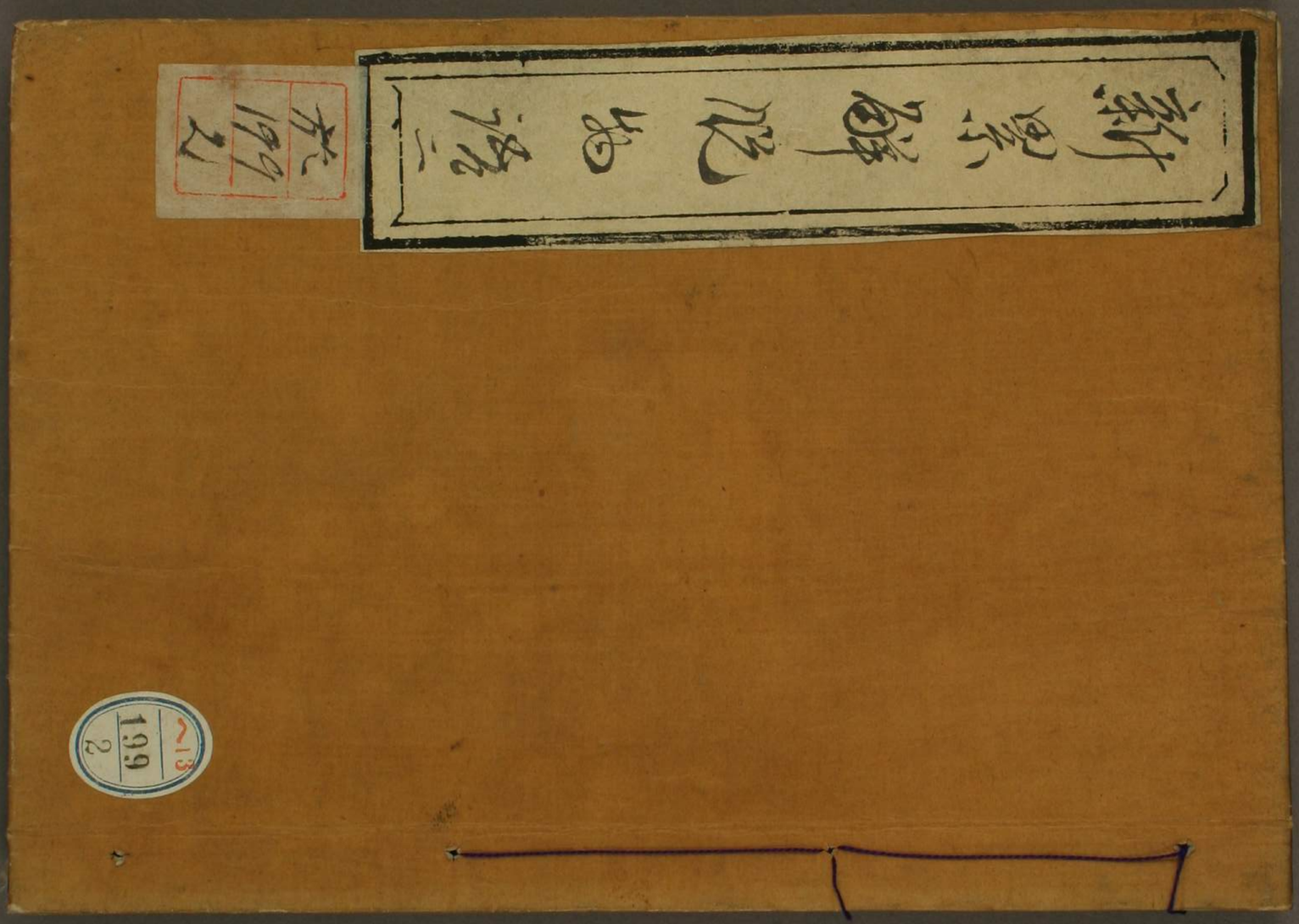
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



7/3
199
2

於
199
2

新累解脫物語　巻之二

東都　曲亭馬琴纂脩

第三

醜婦世を觀じて剃度を願ふ
美男幽窺て婚縁を結ぶ

大公高物を造る小巧拙あり。そゞ中小。女子の醜なるものはめづらしゞ。
さらはあれ。美人うるはしゞも賢なるあるあり。醜婦かるゝもしても愚なるあるあり。彼
いろゝれば人ゝ憎ゝことのいと深し。孟光が伯鸞が嫁も義遠が坂額を娶るこゝろ。
いとの貴ん愛。或いその夢を慕ふ。かゝる奇縁ハ亦稀なりとぞいふべく小さゝ
瘡ゝ。紅ハ千葉惟胤の息女田糸姫のうくまとそ。一朝難疫小よりそ。花月の面
影夜叉のごゝ変じより。鏡とゝ見るのまゝ小とゝもれゝく。身の形あるを見
ゝ。消やゝゝ露の玉の緒やゝ。ある人の數ハ多ゝ。かゝくまゝく小物ハ

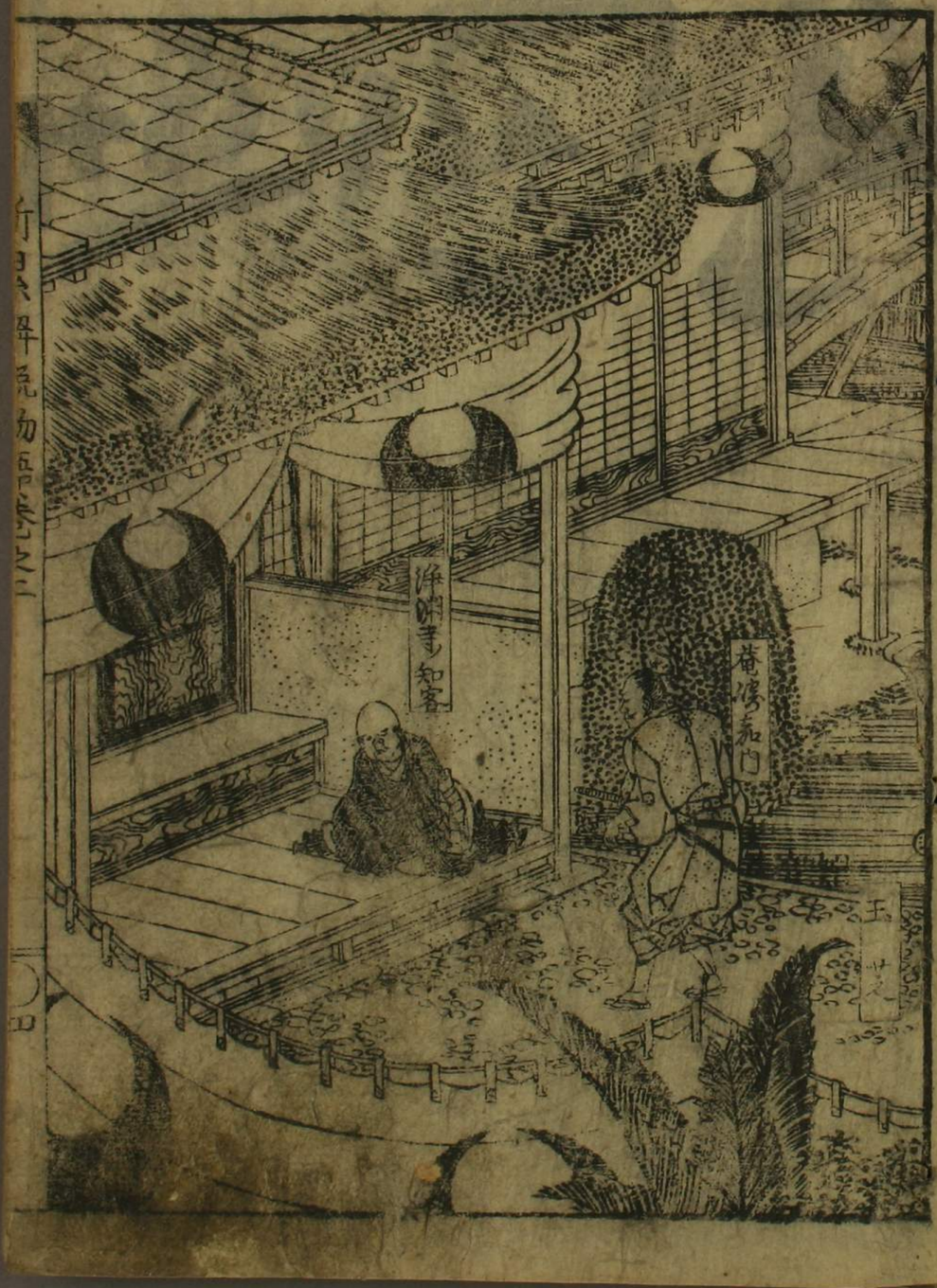
が艶麗なるを、とゝろふつけて、もゝれい千葉家の嬪女と生れるゞ。過世あり〳〵と
うろ影ゐる。彼は又深山木のさらぬるきりぎしに関けど。花の顔自せふて。世の
風流士ふ忍ぶ〳〵。女はゐ彼ゐ〳〵きとゝもるゐふいるゐ禍の神ゐ憂やゐあ
ゐふ。〳〵や形ことと黒商女ふ似〳〵りゐ。んゝゝ吉祥天を学ぶんふ。後世の勤行
要るれとゝく。只且暮ふ佛を礼拝〳〵。近曾剃髪の願ひ頻りふ〳〵そのゝ
ちゞ〳〵父惟亂ふ十さゐゐび。惟亂もいと便るゝ〳〵おぼ〳〵。このゝゞ醜ゐゐし
より。毋ふ憂ゐゐふいゐひはそゐ。三年己前ふ身まゐゐとゝもくても蜀縁を
結びとゞたゐ〳〵もゐゐふ。彼ゞ望を稱得さゝるゞ。一ッゐふ悪業を消滅〳〵。
又一ッゐふ亡母のゐゐゐもゐんゐんとゝ遂ふ剃髪を許されゐ。ゐゐ。浅
草の御ゐゐ浄淵寺の住持。性善鑑忠上人ハ。道徳灼然ふゝ。ちゐも
師擅の因あゐとゝれを導師ふゐゐむゞ〳〵ゝく。聽て彼寺ふ使者を遣

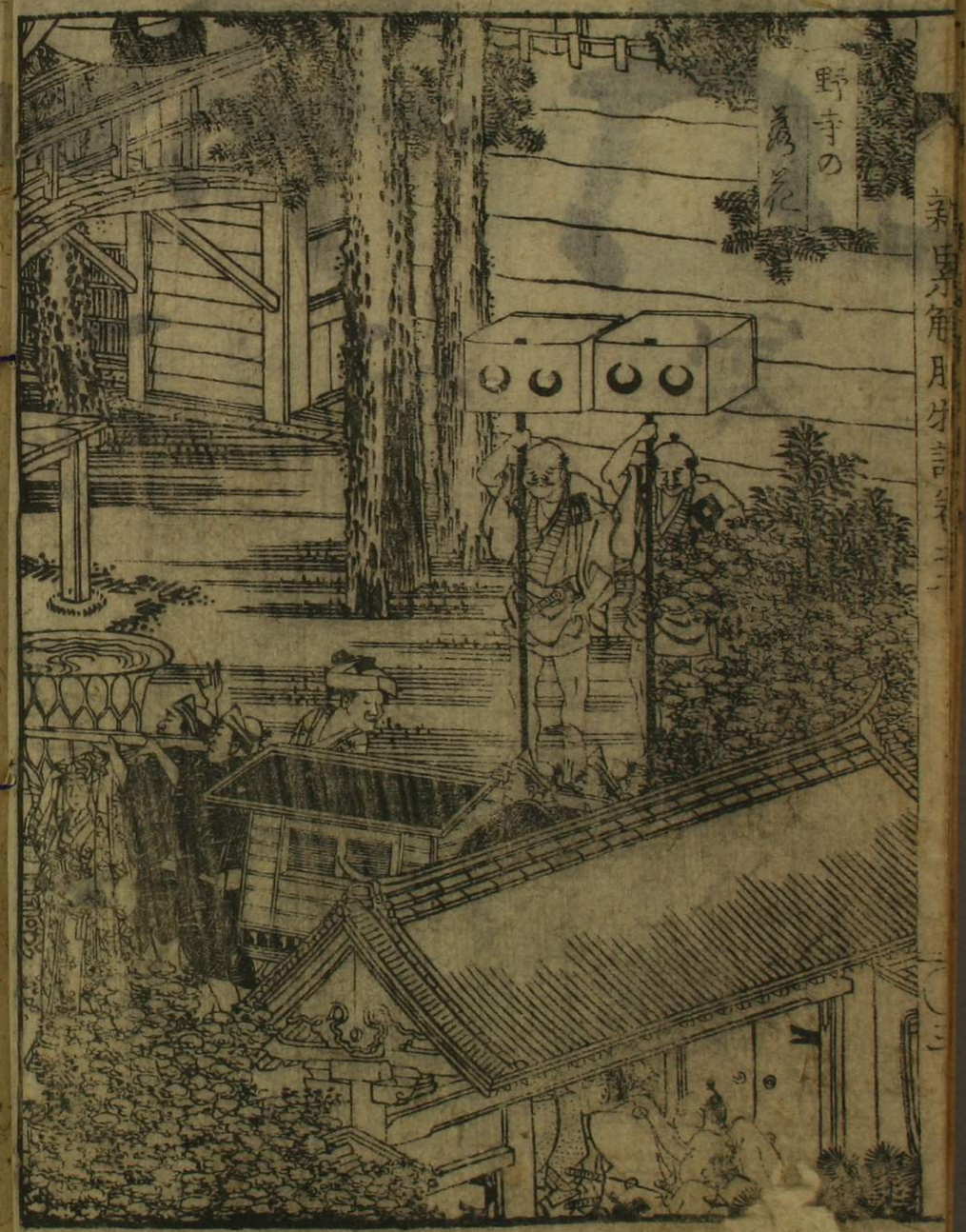
ゐ。縁由を告さゝゐふ。田系雖ハ世俗捨世ふ捨ゐ〳〵ふ〳〵ゐ。
ふ鬚の道倍ふゐゐゐんゐのゞ〳〵ゐ。
の外ハ遠く退〳〵ゐゐ〳〵ゐゐれゞ。惟亂諾ひゝ。ゐゐゞ浄淵寺ふ消息ゐ。
本月某日。女児をまゐゐまゞ〳〵。但〳〵剃度の時鬚の法師ゞふゐゐれんゞ。
彼甚厭ハゐ。このゐゐゐ〳〵ゐゐゐゞ〳〵。頼ゐゐゐゐ。ゐ日ふゐゐゐ。鑑忠
上人ハ。縁故をいひたゞ。行童道人ふいゐゐ。僧衆ふゐゐゐ。山門の
外ふ退ゐ〳〵。髪剃の老僧と。このゐゐ飯沼ゐる弘経寺ゐ〳〵来ゐ〳〵寄宿ゐふ。
新殘意烏有と。只この二人彼殘〳〵留ゐ。弱僧道人ふゐ。ゐひの外ゐ
慌倖ゐゐと歎びゐ〳〵。敏の鳥の林ふ托ゞんゐ〳〵。ゐゐ。ゐゐ。
西入玄冬ハいゐゐ頃千速の村稍盡処ゐ〳〵ゐ。兇賊ふよ謀られ。水四郎ハ
折伏られてゞ〳〵。昏絶ゐゐ〳〵ゐ。浄淵寺の鑑忠上人

擅郎ゐり退ゐて

折よく其処をゐてり。水田の中ゆ死〜ゐる人あるとゐるを〜しぶく憐こぶ。
従者に仰ゐく引あげさせぬべ。ぞひもうけば倍縁ゐる。下總の醫師。西入玄冬
ゐりしぶ。まもく〜驚ゐ。直ゆ寺へ扛せゐり。藁の火ゐく〜氷ゐる肢體を煖
さ〜。茶所ゐれのゐ殘ゐとゐるく〜。んを喝〜く勦りぬへ。玄冬ぞうゆく更
生く。ゆく再生の恩徒ゐるとび中ゑ。父玄北身まゐりて後ゆ。家業もそゐ
ぞゐ〜ゐるぬび。武藏のゐゆ住亦ゐれるとめんとゐひて来ゐる。途中如此ゐとの
幸ゐゐく。命既ゆ危ゐ〜を。圖らずも救ゐをゐひけゐ程ゆ。ゆゐ〜び法顔
を拜ゐることをゆくゐるゐど。ゐゐぶゐゐゐゐゐられど。すぐゆ玉芝ゐるゐ
影護〜ゐひも生ぞ。只ゐの底ゆ恋ゆられど。その後音づれもゆゐくゐ。
常ゐの中ゐの珠を失ゐることを。ぞ〜彼寺ゆ養ゐ。年も暮ゐ。あ〜玉
の春ゐらゐれど。おりゐゐのゐゐゐ。ゐり来ぶ。元来医師の業ゆよくもゐ。

れば鑑忠上人ゐその形勢をゐゐく。彼ゐとも父の箕裘を嗣ぐゐものゆあ
らぬ。とゐぼ母〜程ゆ。強ゐくゐその孜勤ゆゐ。勸めゐ。されど玄冬ゐるゐも
ゐ〜て。法師の養を受んも鈍ゐ〜とゐく。西入權〜丞と名を更めゐ。づ
ゐ〜寺侍とゐりて。内外のゐ孜勤る。住持ゆ俗縁ゐ孜ゐく〜。これ
を茂ゐとゐ〜ぞゐ〜ゆゐの日鑑忠上人。田糸堀落髪のゐゆゐ。
ゐ用の道倍ゐゐ。ぞ〜の暇ゐゐ。ゐ〜をいひゐ〜ぬへ。權〜丞ゐく
只ゐゐ千葉い由緒ゐゐ武家ゐゐ。彼息女の醜ゐを恥ゐとゐい伪ゐ
ゐゐべ〜ゐくゐのゐて。ゐゐ二十歳よも足〜ぬ未通女の尼法師とゐ
ゐりゐゐんゐゐ物蔭ゆ立躲ゐ。その光景をゐぞゐとゐ。
ゐゐゐゐゐゐ〜ゐゐもゐ〜ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ〜ゐゐ。ゐゐゐゐ〜ゐ。
刑罰ゐゐる。鴨居の上ゆ攀登ゐ。幡花鬘ゐゐ。懸ゐ〜ゐゐ。ゐゐ


浮間寺知客
黄湾和尚


野寺の春花

ゆの容子を窺ふ。時刻ずつやく五ツ。息女来ぬと告門声して。田糸姫ハ老臣菴崎嘉内と侍児玉芝を轎子の前後ゝ歩せ。玄関ちゝく入来るとゞ。老僧出迎ゝく。直ゝ轎子を客殿へ擡入さゝらり。當下玉芝さゝらり〳〵轎子の戸を引あられば田糸姫ハ白綾の小袖四ツ五ツ被ゝく扇をさゝ挿頭ゝと面ゞをゝる気色ゝく中ゝ着ゞゝ内玉芝ハ主の後ゝ従ひて蒸襖のゝふ居ゝ〳〵ゞ折しも。鑑忠上人立出ゝく對面あり。ゞゞ寒暖を述。茶をすゝめ。出家の功德莫大なゝを說志〳〵。さて脊ゝど果て後本堂ゝ誘引さゝへ田糸姫ハ備を礼拜。又上人を拜ゝと紀ゝ。嘉内ハ准備の袈裟法衣度牒ゞゞくの僧具を膩塗ゝ月星の紋著ゝる臺ゝ載ゝくさゝ生ゞ。鑑忠上人香炉焼ゝく本尊のゝふ對ひ且く讀経念佛して田糸姫剃度のゝを。三世の諸仏ゝ告ゆゝ。告処ゝ彼所鳥有。亟ゝ温湯浴ゝく生るを玉芝受ゝく田糸姫の前ゝ居ゆゝ為ゝめ奉ゝて。ゝとゝめられゝる程ゝ為入推ゝ亟ゝ。宝幡の際ゝ。とゝかゝうゝつ。且終紀且呆ゝて潛ゝ〳〵ゝ。彼田糸姫ゝゝ未通女ゝ。ゝゝに違れ。醜婦ゝられ。倘葛城の神も腐ゝゝ。ゝゝゝ岩橋ゝ引ゝゝんゝ。笑ひ堪ゝゝゝ人を闕窺ゝく。物吐ゝゝゝひゝゝ。ゝゝゝ扉のゝを直ゝゝ従ひ来ゝ〳〵侍児いまゝゝゝゝゝゝゝ玉芝ゝゝゝゝゝゝゝゝ迷ひ。物ゝゝゝゝゝゝゝゝ

謂三歸ろう。又五戒とは。殺生戒。偸盜戒。邪淫戒。貪酒戒。妄語戒是〳〵を三歸五戒は僧家の大要よ〳〵堅貞勇猛小慎を持べ〳〵。等閑小閑こゝろれ。又偈を説く〳〵。

青春正及笄　削髮度爲尼
參師歎画眉　幻真臨鏡現
求必今來悟　前身受記誰
別冊留粧粉　生滅帶花知

説了さゞ髮剃の僧。田糸姫のうゝふきうゝ。長ク黒髮を鮮と九ッ小紙れ。直小剃刀を拿て剃落さんとする小。田糸姫いとゞ〳〵髮の根を濡さんとゝ〳〵。画ふうち野〳〵口の今宝幡の間よりさ〳〵覗る權〳〵丈ゞ面影温湯の中小うつろう。田糸姫は老〳〵る〳〵外小男といみりのぞえとゝろとゝろゞ。忽ち美男の面影小懸想〳〵御室の手歳。脇屋の義治といふともそはどゝろあ〳〵じとゝろ小。春情ちゞゆく〳〵とふ朋〳〵。ちゞ〳〵え恋をく〳〵あゝろ〳〵。さらさゝ〳〵じゝと和内玉芝ホ小時刺の後ろゞゞいと傷痛れいるどそゞくいおゝ〳〵まんとゝ〳〵〳〵倶〳〵ゝ小。田糸姫ゝ〳〵ゝ仰とゝふもゝ〳〵ゞ。柱〳〵虫と顔うち見めゝ〳〵ゝゞ。權と丈吐差と髮ゝゝ実幡の裏小躾れゝ。ちゝれども人ゝるとれを曉得〳〵ゞ。老僧ゆゝ〳〵ゞ剃刀を取て。既小剃落さんとすれば。田糸姫ゝ〳〵〳〵走り退いゝ〳〵ゞ。ゝゝゝ〳〵ゝゝゝ

色中の餓鬼刃
西入荘之丞
長次郎
田糸姫
沙弥烏有
猛忠上人

とも。又あるじとも。うぶ意より生〻〻意より己をぞ〻勧るに謂ゆとうち脱こうて。
えうつとうる顔つれの。生平よりもるほおぢろ〻〻〻れば。おい内つとぞ〻ぐとの。苦り
うるに。田糸姫つと轎よりうら業〻。ぞ〻撞出とと焦爆うぞ。遂ふちう〻及ぶく
情由ゆ。孤忠上人ふゆえまじ。おの〻〻俱〻〻名濱ふうつ。髪剃の老僧
ぞ。この景迹ふ呆れ果〻れ年未鞭の僧尼。剃度せうるふあひれ。ぞかくる
ふく覚人をえうとと。とと咳ぞ。波弥鳥有ゆえぞ。〻〻さのこ議ぬひを。彼女子
仏縁ありとのぞ〻ぞ。その期ふ至ざる狭。故ふ道師の説ぬつる偈の落句ふ。
未必今来悟という。又後うるぞ清果をいつぞ〻と信うちてさ〻ず。ゆ老僧
いとく冷笑ひ〻。かくて田糸姫ぞ。名濱の館へ帰ると。ぞ〻ぞ〻ぞ〻室ふ引籠。衣
を被ぞ〻くうち卧〻〻〻。父の惟亂ぞ。嘉内が一五一十をさうぞふ〻〻〻。大うり
驚ぞ。何故ぞうを成〻果さぞ帰〻ぬひうと。向ちうくふ。田糸姫ぞ回答も

ぬく。日ふく。ぞひほうるぞうう〻く。薬餅の験もあうぞれば。惟亂智ふ。内を
うぞよ。二人の間ぞ。ぞれ疎うるふあうれど。田糸ぞ過世ぬく。三五の年ふ生れも得ぬ魂
ぞとあうるう行ふぞ。便ぬ〻〻〻ぞ〻。さるふ。ようて此度出家とんと。ぞふ。ゆ。
彼ぞ隨意一生ゆ。おううとんとうふぬ。ぞう。ぞう〻ゆ剃度の場ふ臨ぞ。猛ふ志ぞ。
ひ〻ふ。ゆあうべく。ひひ〻〻行ふ。須日ぞ〻〻〻向ぞ。れど。彼ぞ〻ぞもいふ〻ぞ〻〻〻。
ぞどう〻〻〻。ぬうぞう〻ゆ。ぞ〻〻〻玉芝ふ。日未ぬ〻れ〻月のとゆう。涉玉芝
ふうぞ。旨ゆ告ぞ。ぞのびぞふ。田糸ふ向ぞよ。ゆふ。ぞれ彼ぞ願〻きうゆ。ぞう〻れ
必聴ゆべ〻。ぞの〻ようぞよと仰ぞれ。ぞれば。ぞ内ぞう。ぞを得〻く玉芝ふ告ぞ〻ぞ
ふ殿の宣ぞとぞ。賜〻〻ぞ〻ぞ〻ぞ向課〻ぬ〻ふ。玉芝ゆ。ぞ〻ぞ〻。ぞう
ぞ〻て。ゆ〻ぞ〻ぞ〻ぞ。ぞ〻ぞ〻ぞ〻

如此このようにきまり仕り。國郡ともうしぶんなく厳しく叱責とがめ。これを推辭申さば不孝なれこそ。
親の命に換へ難きやうなるべしと信ずるにつけ。因果姫に世をうらめしく
気ろこころく。長搖除つくやをうら身に成起し。親の恩の高山も況んや
とぞうるべしなるべし。今ぞうるうふちもられてぞくも物を思ひまるに孝の
罪いと深きをいふとんさいくのくのうへふとこうも。せんうう外にあしく。
人ふかとやうる過世ありとやけびいと朽きくも悲しきに。ふたりの人の板ばさ
び。妻に成姿とうしようとも夫に見んべきもおぼえぬ。さいびに法師
とも客をうつと後の世安くせざやとて。さび雜髪の頑なるをその場に臨る
折しも。浅ましや鴨居の上。幡蓋の蔭に躲れて。闕覗せしの面影。あやうく
匹の温湯にうつるが忽地恋墓のん蔓をつたへるごとくうつうつとも
思ひつとも。迷ひの雲の晴やらぬ。真如の月いとるめも疎く。思ひの人の面影の
まぼろしふるる。夢ふかひ今の世乳浮度せんとて。一切思ひもうけざるこそされどこれ
のこ袖に濡らせそうく風の糸薄。招くひるる醜ふ。靡ごと弟と
恥ふ。ふまぢいやえざり。ず。父上の威勢ふく。彼男と縁に結びしぬ。
ふとともうえく恨む。他に成る限をうれど。世に信ずに月のうるはしかくい
告ぐ。そこのひりけく。袂を顔に押當れば。玉芝やく呆れ果ぬ良さもて頼う
ちまうられ。ぎ。ありやとやう。男女の情に容止の美恋ともうとと神に締ぶ
あふとやく浮られ。ぐ。ふ。ふ。ふ

かの日ゝふ。寺内の道俗を遠ざけ、人ども定めて、仰ぎの一枝見ゆるが如し。
を窺窺ゝるに、玉芝紙ぶぐ。ぶゝ同くその細紙をあくべしと。
芝を石生ゝ同。これも又喜内がまこんに違ひどの日濫上人の処に
人の徒弟のミ仏ゝ。物の蔭に人のけはひもなくなどいふ。惟亂いく不審ミ。
ゝふ野干天物をどのものの隙を窺ひ。田糸が道心を障礙ゝるの族。
又實にものあるゝふ。縣の禄をかくとれを誘ひ彼が情愿を遂ひさとべ
し。喜内は直に淨淵寺に越ぬ。住持ふるかりの経をゆえ志ぬ。そのくゝとと
ゝふ。叮嚀に乞受よ。萬貫の禄ありともぶるの命に換ぶ。ゝと仰
ゝる。實に尊ぬも卑ぬも。親子の恩愛にけだものゝ片羽ありて可愛
しと。世の常言に慎ぶれ。正に是田糸のうへに。狭あるを紀縁故既にこゝに
明しぶゝる。彼に菴崎喜内がその日。淨淵寺にあくゝ。温忠上人に対面し。

主君の言語を述ぶ。糸姫病着の縁由を告。惟亂父子の恩愛遣ゝるく
世の誹謗をゝるゝ。ぶゝ。ゝ面ゝぬるを中ゝ進ゝ。已ゝ成得ぶゝるのり。
ゝくくそのくを賜りゆくゝ。ひゝふゝ。上人ゆくゝ。怪しゝ。足下ゝもゝ
ゝふぶゝ。彼日は寺内の道俗を遠ざけて。法師二人の外に。ゝ。彼に同ゆべし
ゝくゝ。その日。副に付ゝる。沙弥烏有を呼びてゝるゝあり。世そのくを去れり
ゝと問ゝふ。この沙弥は。厚江州佐々木の庶流某ゝるゝ。父母世を去りし
ゝゝ。十三歳の春。下總國飯沼ゝる。弘経寺に入りて受記。彼処にゝる
を五七年に及び。近属法縁に入ゝゝ。この淨淵寺に寓居ゝ。その宏才厳悟
萬人に勝れ。経ゝゝ讀ぶゝゝ。道ゝて修ゝゝ。彼そのゝゝゝ
とゝゝ。道の道とゝべぬは常の道にあゝゝ。名の名とゝべぬは常の名にあゝゝ
これ老子の語。老佛元一體ゝゝ。それゝゝ釋教萬巻の経文ゝ。説無

足らざといへども。その淵源空無我の一句に出づ。されば禅家に十二日名を稱ぜざる謂なり。苟且名あるものは人なるべしこれを呼ぶべくもその名を高しんとをかいぐ利を棄光を埋こころの廢筏ところのとくさえく法号を稱ざりけるとび衆皆その卑見を稱賛しこれ烏有と呼ばるる。烏有いその人あるにあらざるといふべし。是はさておく此孫烏有。住持の言をやと芸尔とうち笑ひ上人は知合民ひなどや。因糸姫剃度の日。本堂鴨居の上宝幡の蔭に躲せく。幽窺志さる人あり。役疑あらず西入氏に問ぬ。夕おのづから明白なるうんとうなり。盛忠上人いかの母實しらべどもひろがり。日来その此孫がのよところ。毫髮も違ひとるうれべさんとく西入権く丞成ぬべしとせく。一五一十を說ちもせ。世分かぼえあらべ。匿ところあくやんべとぼえのふ権く丞恩北面を板しまとくく額に加いつきづ回答もどきりが肚裏に呑ぬ。陰てその主すに養ひる。梁園好とりどもと久恋の家に来あらべ。彼醜女にありれて。千並糸家の壻ともするとあらべ。今の憂ふ揺らべ。加藤玉井之介田糸姫に給事をとおぼめふとれと一ツ家に住んで。願ふに難ふべ紀傳はあり。と尋思しまとり引ひくいの宮。宮ひとを出びげにさらのひひ紀とはうり遠く退出ずと仰るのあり。どの田糸姫とゆうんいとろ紀に尼とありのがあり。小痛くてその光景をえまほしさに。まさろのひとを公とぐ宮られ。とろどの面目をとは上人點頭あり。惟貞はしりの如此。のうしとゆえあり。彼家の招紀に猫ぼび紀と問ぬ。桂に永昔て月武家。小招ひく月の兵法を学をとく仕ろに。あるいは蒙らんも又に苦しまず。不肖の某とかくを中紀ふあらべどよろ

ゆきうさをぬくうとのふ。盛忠上人ゆとよ。三ゞ元気をふて千葉家いわゞの者の大檀那なれども。世々く推辞ゞ。されゆ千くとりさぐるを頭の領掌

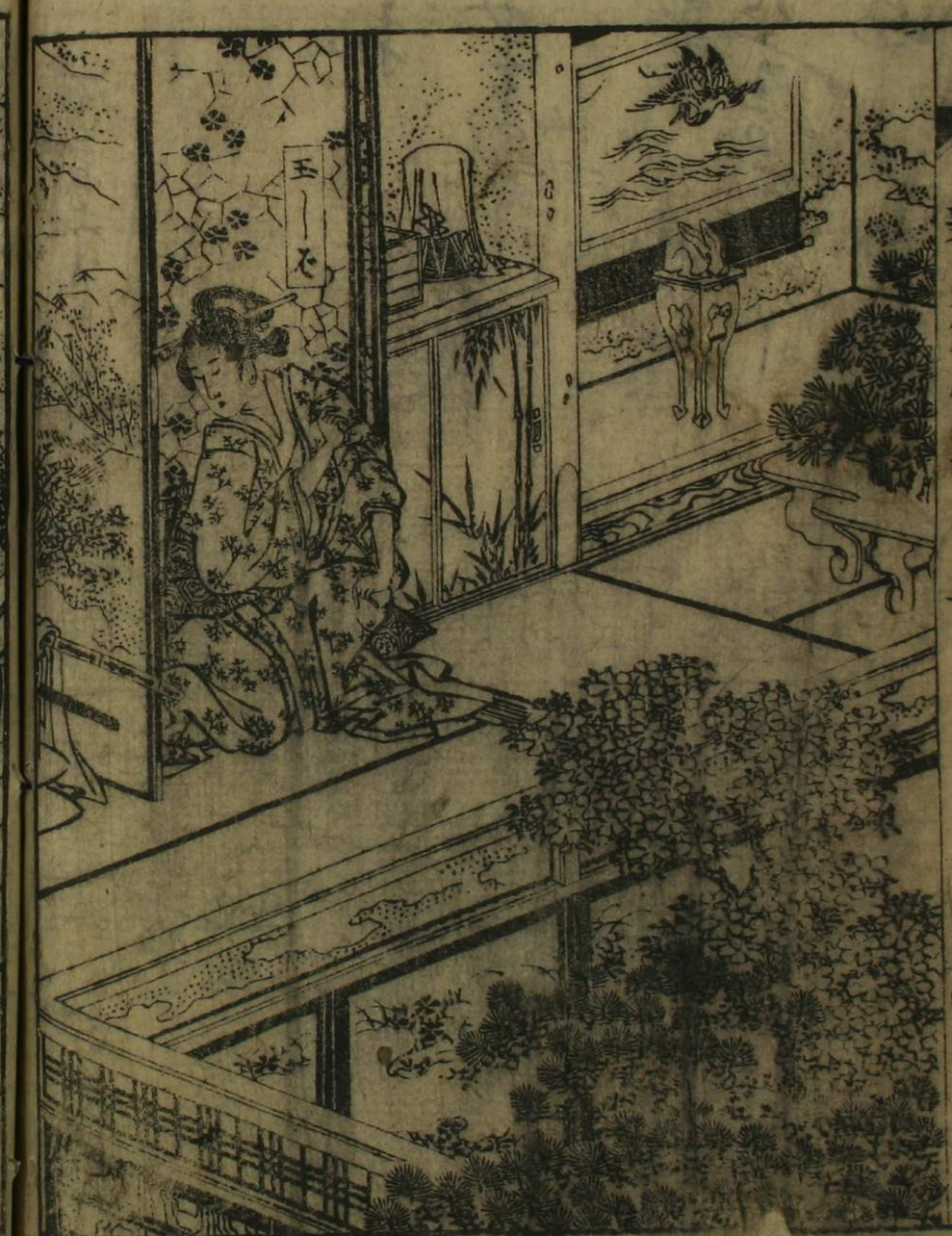
ぐく足さう。ゆゞ菴崎氏ゆ引あらとべーとそ。嘉内ゆ計ゆ。年入薬未の目今ゆ。

るゞ如ーとの弱人ゆ拙僧ゆ俗縁脱ゞ。元ゆ。

原ゆ下總の國人ゆ。ゆくゆ。ゆくゆ。ゆくゆ。醫師のゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

寶ーくゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

炬燵のちぐら
田糸姫
西入侍之姿


玉ーた

権之丞も理ってこれをひすがら。絶くこれをとりもあるべ。熟ざるこのかくしたる。
もろ〳〵きく物をぞ。いらひければ。玉芝はいらく憤ゐ堪ど。東郭齊ゐ奉られと。
麗人妖艶を悔ゐ似るりされい田糸姫の権之丞ゐ嫁ゐるゐ。亀鶴夫妻の
故事るも劣るべ。抑醜婦の美男ゐある。百年の苦樂を人生とるれの
稀るり。此度の婚姻そのよろしゐ。ふあ〳〵どとこゐあるもゐるゐ。ゐく唇を
ひるゞ惟亂父子の憂鬱凝情を。識らざるものるりりりとゑ。

第四

西入奸を謀るく田糸姫を隔新
織越禍を釀しと加佐禰ゐ傷ゐ

かくて四五日のゝち。田糸姫帰寧ゐく。館ゐ到るゐ。玉芝はいるるるりとと。従
ひ四ゐど。奴婢ゐ殘るく出る。権之丞が倚ゐ人ゐ。おとうゞ人忙しく卧房を
走出るくるの膝ゐ縋り泣。裙の上ゐ涙ゐ落る。涙ゐ物をいるとる田糸もさるゐ

ゐるゝと。ゐをかくるの背を拍ゐろし。縁由をゐらざれば四方ゐ恨るるゐ。
られ栄利のこを謀りて。當家の壻とるりふあ〳〵どゐ。ゐく四方と契んゐ。
るりゐ。まづるゐくを物ゐるゐべしとそ。ゐる冬千速の村稍盡るる。水田の中ゐ
仆を居るる折しも。檻忠上人の救ひとゐるゐ。ゐく。ゐ命を助り。彼寺ゐ艱れ名を
権之丞と更るる。且田糸姫剃度ゐんとしるる自。その爲体ゐんこそ鴨居の上
ゐ鯨を登り。そゐゐく情人の千葉家ゐ給事るるをもとめども。物いはるるゐ也
るりつるる。亦此度惟亂の招ゐ應しく。田糸姫を妻とし。ゐく。ゐ級あ
ゐべるりといひけく。玉芝ゐ耳ゐにをさしゐを。元某四方とられ人の汗ゐ夫婦ゐ
あくゐ。ゐるゐ四方ゐ武家ゐ給事し。ゐれゐ道場ゐ扈従しゐ。ゐ人を運ん情を
うるゐもとも。七日の雨ゐ牛女のそれてあゐ淋ゐあるべ。愁ゐ情愿を逐じ。ゐ心
忱不義ゐ罪ゐられるべ。ゐ悔ゐ。ゐるゐ。ゐ田糸ゐ。ゐ。ゐ千

業家の誉とのわるる。富貴両ながらなるのみならず。彼醜婦をとりくりく。
ながくに牙と楽をしたれ蚯蚓をりくく奥を釣の業ありとぶらぶら猜ぶるえぬ
られいそろうの富をかりのもに身がこふあるとちくむいうぞう彼嗤槃茶と妻とと
ぶ紀行るもろぶ意中ふあるあるとぶとらるもすれ。べらとや疑ひと散ぬ〳〵。
さまざまふひと慰めさて玉芝ちでやく莞介とらら
笑さるるともちくくく権くも恨作りとを悔紀の日千業家の列卒ふ打拾た
るのどもの廣沢沼太郎。高屋鳳五郎とるんとる盗賊ふとぶ身を縛くる紀
鳥の社頭ふ到るる。折ふくも惟胤の猟〳〵帰てあふ逢進らと二賊ふ去紀
ふ誅とられるうぶらあれにの牙ふ既ふ打殺されぬひんとるふ尻もええと甲斐
の間ふ猛獣の衝去るるふとそるとゆえ〳〵。悲歎いぶらもあるぶ紀惟胤と便
ると館ふ誘引ひとり。聽く田糸姫ふまわり仕作りとて是彼の舎諸ふ

や時もうつり忍紀外の方ふ人の来門〳〵く。田糸姫とうあひひと告るるとと横〳〵紀耳
を側て。醜婦いくさく僻ぶく。物妬ぶいと深紀ふぶるるとと暁浮〳〵れくる紀恨あり
ぶ〳〵。とくくとをとげて。舊の卧房ふ〳〵〳〵り。田糸姫ふくとも方〳〵ねぶ只権ぶ
巫が妻とるり紀。世ふ娼〳〵紀るふおぼえく。ぶのむろうも高ぶ〳〵と。敬ふ弁眉ふいと
信ある紀。夫ふ却ふくうるさくたひるぶく。化るるるとさまにのとるぶぬ時既ふ五月の
ちどめふ至れり。権ぶ巫ふ毎日ふ出仕〳〵く家ふりもあるねば降ぶると送梅雨の徒
然るるふ田糸姫ふ窓の下ふ勤居ぶ。長紀日の遣ぶとるくて。玉芝ふ荒紫琴を
操持と権ぶ巫がふるを倹べ。玉芝ふいとれるくて。ぶの限りを教ふ調曲ふ托さう
るる紀。田糸姫ふ暁浮〳〵ぶと。彼ふくるぶとろ紀ちれりとく歌べりこふふ織
越与左衛門ふ紀るる年羽生村を嶺ぶちく鎌倉ふ起紀ふ玉芝去るぶれ紀
を捜索るふさえてその往方をぶと武蔵ふ鎌倉ふも苏らるる都

与九郎

田糸姫

なれば彼ホリをのこうふ鰥ヨ居ることりやとおりひとりの妻ちう陽島の在家ホ僑居しめふ三物を賣。式い傀儡師ホ打扮く。人のつどふぞたところ。殘る隈なく経歴つ。春もいぶ〳〵に暮く。夏もや半ホ至り。端午も既ホちうれば。菖蒲人形を賣らんとく。鞍の木偶を傘の裏ホ結さげ。ちうくぶ也権之丞が窓のほとりを過るホ。只今ホ凡音いと数ホ操持と琴の唱歌い。玉芝ガ声音ホ似ちうどい不審と思ひく之とぶきちう。熟聽ぶとくホつけぞまぐぶうもあるその人のれが因怪と因ぶび怨地声をとりえく。菖蒲の人形めとれどや。小兵衛人形もゆど右近のろまもめぞと高ぞふ必てろう。玉芝られをとりと因ホ彼商人のとび声い。ひとぞうん熟ちうぞうふおぼゆれがぞと頭を擡つ。簾の隙より直下ホ前夫与左衛門ちうしぶ。腕うちうとぶく調ちく乱ちくを思ひふ〳〵とうとび果つ。与左衛門既ホ玉芝とちうとられい。直ホ走りいりそ。引も捕沼

まほ〳〵くいあれと。家のかり千葉家ホく威孰のある老臣あどの宿所ちうぶくえゆるホ殆止ちくはその窓ホ目標しいと遺憾げホ帰りちう。かくくその曛昏ホ權之丞館より退とて陪ちうホ。玉芝い陪哀ちわくもとちくぶちうそのちうちう到り。汗ち流〳〵つくさ〳〵ぶちうぶの如此とこのぶ仮りふぶらもかけい前夫ガ菖蒲人形を賣ちく窓の下を過ってちうふが声音を聽怒ちんぶんもしい立も去らざりしと物ぐちうホ。權之丞はちく恚ぶ尋思ホ怨地然ぶちうりちうい彼与左衛門ちうの地ホ来ちく。商人ホちうちうふは身とちうれを穿んちうのべしぶホつ死て謀ありぶ成らぶ日来の情原を果さんもいと易しこの計較ち猶様ちうちう。耳をとりちうくひとめぶ苦ちうホ玉芝い相語向も景獲ち。ちくとのふを沼物ホ紛らひ走り去わざそも織越与左衛門ホ。玉芝ガ在処をち怒ちくちう。ところ頻ホ焦燥ちく。次の日も彼処ホ赴ぶ權ちく丞ガ窓のほとりを往ち

選つゝ〻び〻菖蒲人形をめさるべ。甲人形をめされどやと問ふ小見〻く仔
の窓より簾をさと〻りて揚ゝぐ〻〻高人嘲と呼らけり。女房ついと
さらられ〻〻人形めさるべうりやとく歩まるとい裡より弱弱世の声〻その人
形をとりとむべ。價いろ〻ろ〻ど問容止とそ〻とうえぬ。その声音い疑ひべ
うもあ〻ぬ。玉芝ふ〻くあり〻ぶ。女房ついて近寄り〻〻じく。物いべくもあらねど。
こゝぞ〻ゆゝんと思ふ〻ぶほ〻ゝ〻ゝ〻ゝ。價いろ〻ぐ〻ふ〻ぐ〻れ〻やゝ〻ろ〻ぶ〻ゝんとて前
ゝ〻ゝ人形を取ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ。白く清らゝゝ腕を出て。簾の中小とり入れ長
ゝ〻ゝ字紙小筏を巻ゝ〻ゝ〻ゝ。女房ついの乃体也ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ其処を走り退ゝく物蔭小立在。銭を畏ゝる紙を押披て〻ゝ小玉芝
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ玄冬と走ゝ〻ゝ過を悔ゝ〻ゝを書ゝ〻ゝ〻ゝ絶ゝを立
退ゝく〻ゝ〻ゝ〻ゝ途中ゝと猛ゝ盗賊小出あひて。玄冬ゝ命を隕ゝ〻ゝ〻ゝ分い

彼小ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ。千葉殿の猟〻ゝ〻ゝ〻ゝ危窟を救ゝ〻ゝ〻ゝ老臣
某の婢ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ悪報ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

只うのいく行の艶筒に鮮と。のく紡ひ。玄冬既に死して玉芝志を改るう
い誰とろ仇とく誰とろ軸のんさらぶまうちんとらひく旅宿に降りその日を
傳くまうとまつ行に光陰委るくと。流るく水もわるくめく六月十六日うも
ありにり。椿之丞い像く計くとるひ。その黄昏に舘ようり退ると。枕
引とそく卧るふと物思くに気色なれば。田条姫あてこ。ぎその裾に
衣うち被ひい生平ふりうとうえあひ。ひ枕いふ心とる。朋輩あどあす
ふつ紅く。れくとおぼとうあまるぎや。縁故をゆえあり。と言ぐ問れ。椿之
丞をそう身を起くく嘆息くいふ問くともひ。とひ定つが後の歎
をおりひまふんうくと。首尾をゆあるあり。に身も豫くちりあのどぐくの
い宝藏の重器ども。成虫曝さゆあふ。ろ。預まる御教書をむく
右大將頼朝卿。當家の先君千葉介常胤わくに。賜まるりのうとを

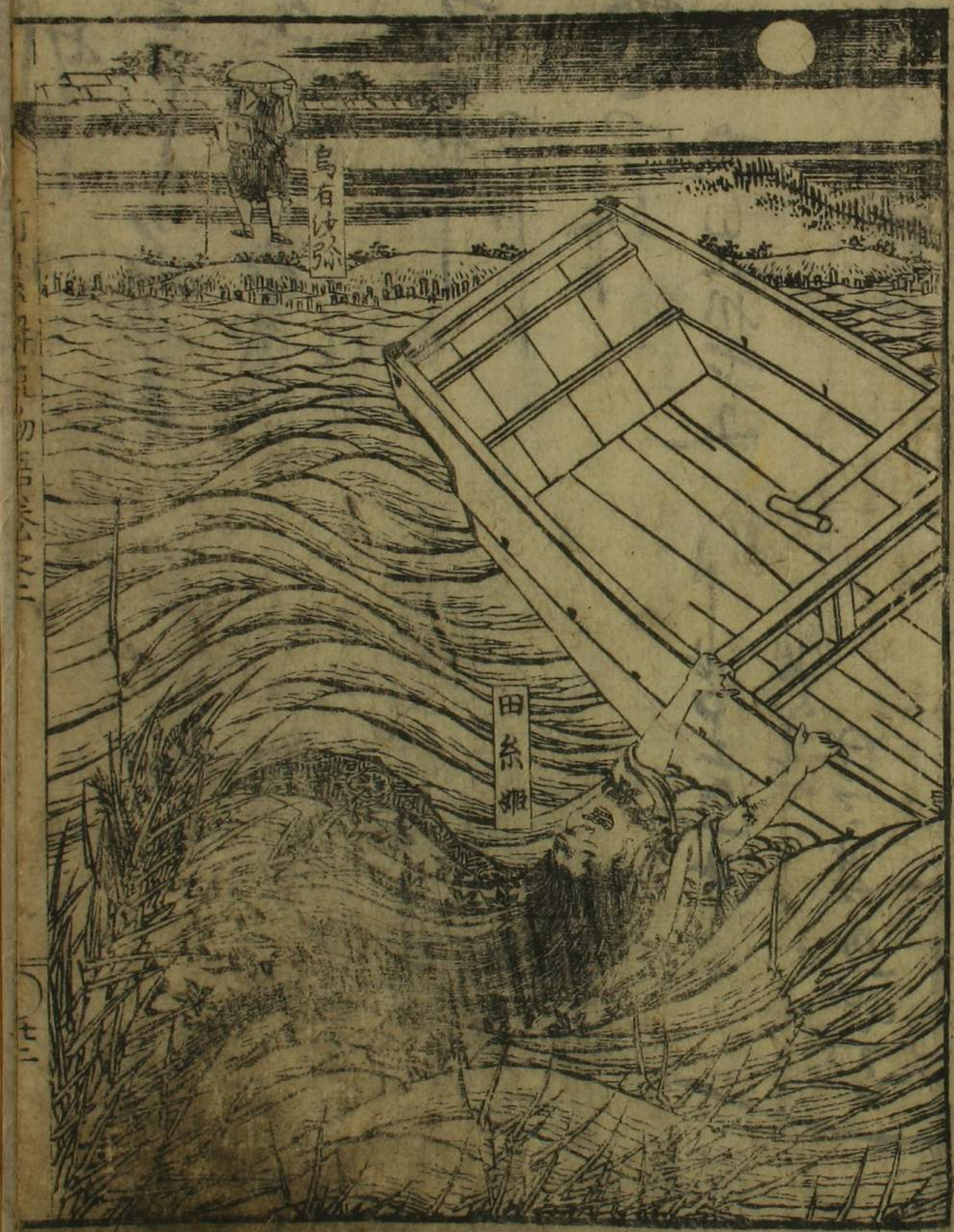
りくに殺るもとに秘藏とあひれうけありて。件の箱を抱に終日伏ったく
傷を。さらぎりるふ。折くもとうく風のまふく。彼御教書同とくて。椽ぐう
に物出るを。庭にある折戸の蔭より。猫忽然と走り来つ。狂ひ戦ひて。机を
御教書を引裂くうぞいうくうくうと慌忙走るつく捕んとするに猫はそ。逃り
るや。怕迯るん。椽のひ。走り。脇れくあるくひ。出ぞ。銅の係るところ。予。鮮ひ紅言語
あるれしが。潜に被迯るる御教書を。相に。舊のどく。塗龍。納くうしが。
あぐいかくてるるとぞいうまぞう。遥。裸ぞ。所。腔肚に紅切く。死るの外あどそのの
時に。ひひ。究て。退出くを。問るに。牙が。悲に。絆とるりそは。説てもぞ。くれるをそあ
ありぞいはそまぞぞといひもあぞ。りを。含まく。拔放さんとするを。田条うち。愕て
肘に。推ぞ。こに。浅まくに。るるまあひそ。死んと。宮ふも。理るれどぞ。くやと。ふて。死くあ
とぐぞ。很御教書の。舊のどくあるも。仇。迯。元来。猫の所為。れに。過くくく。過

るゝね。縁由を潛せふ。こゝふまのりく父上ふぜえあげ。り寛汐ごうゞ
國の御へも奔て。折を俟て恩免をねがへ。とふもくるもゝ殺さゞとくこうゝく
棄ゝ刀の目釘も涙ふ濕るぞうゝ。權ゝ逐ふこの醜婦既ふ計策の為ふ
四維ゝねと霧ふ拔びまゞ尋思もるちくちゝそのゝるゝ。ゝが異見ゝ餘
義ゝ。ゝゝあれど。殿ふ十さんさゝちゝるゝ。父子の恩愛ゝ私ゝりゝふ歎
ゝ。ゝゝあゝとも。愛子の奴をゝく。家の法則を破りゝあゝゝゝ。只一旦の死を
ゝゝとぶゝ。今宵夫婦ゝゝとも走るゝ。されどその姿ゝゝ出ゝゝ。ゝのゝ
むゝゝふゝゝの單衣を被ゝて面を裹ゝ。衡門のほとりふ来ゝ。ゝふす
ゝ先ゝゝ。彼処ふゝゝれて待ゝゝ。十六日の月影も暴ゝるゝ幸ゝる。初更
鐘をゝゝゝ。時刻近ゝねゝゝりゝゝ。ゝゝゝ身ゝゝ妻ゝゝ。千葉の
蟾ゝゝゝゝふゝゝゝ。世の埋木とゝ果る。痛ゝゝゝゝ

ゝけゝ。頻ふ瞼をゝ拭ふ。田系姫ゝゝ。ゝゝ貴ゝも賤ゝも百年の苦乐
他人ふゝる。日蔭の草とゝゝゝれ。結び果ゝん縁ゝとゝゝぶゝれゝゝゝ
ゝ用意ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ牙の仇とも白麻のゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ信ゝふ。夫を諫ゝ
ゝ。初更の頃をゝゝふゝ。浩処ふゝ左ゝゝ玉芝が合圖を遵ゝゝゝの夕暮
ふ張宿を出。權ゝ丞ゝ窓のゝふ潛ゝ未ゝ。暗三ゝ四ゝゝゝれゝ裡ゝ三綸
違の紋著ゝる麻衣と。貫布の袴ふ太刀を巻ゝ。投出ゝゝゝゝの麻
衣を被。袴を穿太刀を帶て武士の打扮ゝ。遥ふ築垣を繞ゝて。衡門の蔭ふ
立ゝ玉芝が出来ゝ。今ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

とろ〳〵ふえうりぶこゝろの人あり。とこゝ後うれしと。扇を半開にかけこゝ招
けば。せも忙〳〵走り来つ。點頭めの。こゝ声をとゞめ。ろともふつと外の方ふ走こゝ出
まを引あのていそぐ招ふ墨田川原まゝ落伸こゝ。こゝ一息吻こ向ふ
渡さんとせれども。夜ハ渡守のめゝざれば。彼此とまゝ〳〵ぶ。行ゐる蘆の中ふ
繋ぎ捨ゐふ舟あり〳〵。これ究竟ゐりとゝく。遽〳〵く女双扶乗ゐるふ。これ
懐より紙包出ち。舟答ふ当て。鏗と音ゐる。ゐ左ふつゝく。猜〳〵こゝ
彼鞍の金をさゝ〳〵と来れり。かゝる時うもいとかりとりうとゐふゝく憎〳〵
ぢ〳〵く纜解捨て。その舟も内と乗つ。棹をとゝく漕出せり。この日浄淵寺
ゐ。沙弥鳥有。猛ふ弘經寺ふ帰らんとせ。鑑忠上人ふ告別〳〵。既ハ立出んとす。
を上くゝりゐ〳〵これを留めゝ。いとや暮ゐん。おゐ〳〵い翌の朝ぢ〳〵ゐ発
足あれ〳〵と宣ゐるふ。鳥有答ふ。僧去歳より十八年ゐ間ふ。二男二女を

浄度ぢ。因縁あり。こゝふまのゐもそれゐ乃今一帰らんとゐんもそれゐ故ゐれば
且くも躊躇ぢ〳〵。殊さ〳〵夏の長い夜こを涼〳〵と路ゐくふ。ようけれこゝや
退りゐんとゝく。錫を拿笈を戴ゐ。こゝく走り出ゐふ。短夜のゐふ。あこゝぞ。
暮ていく程もゐ〳〵ぢ。既ふ初更の比ゐもゐ。ぬゝくて鳥有ハ。次田柳
島をとゐぢ〳〵く。墨田川の畔ふ到り。とゝゐふ目今漕出せ渡船のあこ
りれハ。ようれふ便船せん。その船ぢ〳〵俟ゆ。ぢ〳〵と呼びけゐ。時ふ忽
地雲霄れゝく十六夜の月隈ゐく照〳〵。金波水陸ふ映〳〵くさゐ〳〵昼の
ぢ〳〵。ゐ吹ちゐふ川風ふ。船ゐりゐる女の被衣さと裏ゐるふ。ゐ左出ハて
ぢゐ〳〵その面をとれば。玉芝ゐらゐ〳〵ぢ〳〵。夜叉ふ羊〳〵ぢ醜婦ゐり。こゝ
そもいふと呆果。汝ハ人ゐ愚ゐと問ハ。田糸姫も又権ゐ巫ゐ〳〵ぢをとゝ
ちふ。終ぢ。且その欺きゐるを暁ゐ〳〵く憤ふ堪ぢ。汝ゐ分を行ゐのとに


烏有沙弥
田糸姫

市弥
与九郎

とゐうれおのゐ汝いてぶ夫ゐ相語れと。こゐゐ仮引出し。竊ゐ殺さんとそゐ
とそ。遮莫恨をいわざ〜と。ゐゐ非道のふゐ死ん。あゐ〜わ〜腹立ゐ〜と
の舩を漕戻し。舊の岸方ゐ扶あげぞゐ。世も安穏ゐゐおうぞと罵ゐあく
ぞと寄てて棹を奪ひとらんとせるを。こゐ〜せ〜どとあゐ〜その花ゐ。田糸姫
声をゐうえて。賊ゐ賊ゐ賊ゐ。それゐる岸ゐ立在人救ひあいとゐれゐ。ゐ左ゐ
大ゐ怒て。田糸姫の項髪掴ゐ。水中へ火と衝墮し。忙しく棹を拿ゐ
ほゐ〜。向の岸ゐ漕出ゐ。既ゐ彼処の人のゐえ憑やゐうとゐゐ影護と。
麻衣袴を脱捨つ。太刀を巻とめゐ〜川ゐ投入を。田糸姫のゐて来ゐる。
紙包を懐ゐ。足ゐ信〜と逃去ゐり。さても西入権ゐ丞ゐ。おゐの隨ゐ謀
課ゐ〜。ゐぞ〜時をゐう〜。その暁方ゐ。田糸姫のゐえざると。俄頃ゐ
騒ぐゐ。彼此へ人を出し。部〜と索ゐるゐ。畏皆あゐと〜ゐゐ〜ゐにゐゐぬ。

然てあゐぞゐゐあゐぞとそ。詰朝縁由を。惟亂父子ゐ決えゐるゐ。惟亂ゐゐ惟亂
然ゐ。神ゐゐ幣帛を奉て。佛ゐの香花を進〜と。ゐ顧ゐ田糸姫忘ゐくと
帰り来ゐさんゐを禱ゐの外。他事ゐ。高日を連ゐく遠く人を出し。その
往方を捞索んとゐるゐ。ゐえて好音もあゐざれば。世ゐゐ死人と呂ゐ絶。追善の
佛支叮嚀ゐ営ゐり。ゐゐゐれ田糸姫の逐電と〜縁故を。権ゐ丞ゐ。
ぞとゐゐ。ゐぞ〜ゐりとゐて。ゐ〜一且誓言をえて。生乳とんと呂ゐ企ゐ。忍他色
懲ゐ懲てゐゐと成果ゐる。眞ゐ罰ゐ。地獄へや墮ゐん。又魑魅ゐど
いゐゐゐ誘ゐ。ゐとゐ〜ゐゐとゐ。ゐの須ゐ呂ゐその人のゐゐのゐゐゐ出ゐ。日をゐゐり。
ゐる程ゐ。ゐ左ゐ。玉芝ゐゐゐゐ。ゐ〜ゐ係ゐゐ。既ゐ人を殺ゐられゐ。更ゐあゐ
べゐ便をゐう〜ゐゐ。路の程二三里逃伸ゐ。奪ゐゐる紙包をゐゐ。
五六十両の金ありゐり。ゐゐそゐゐゐゐゐゐ。ゐゐ玉芝ゐゐゐ

ひとえその夜は通宵走り。次の日もいとく絡はいそぎゆたくと故郷迫くな
ってぶまづ法恩寺村に赴くと。村長清三郎が家に到り。手をつこを見ち
帰りはとは門。おのゝ夫婦忙しく走り出。こはいかゝ。昨夜や今
朝。これ身ゲ。をいひ出。とく程に入ってもあくとの。歎待日未ふうとゝぎ
れば。とた他つとその信ゆうの。ふ妻堵く。草鞋穿捨つく面屋に到り。ふ別後の
恙をたずねびとえと。先ゆつくとひていのやう。久しく女児を預かりしうふ養育
もことをとゝへば。猿ふあるんもあくいまゝ。彼ホふ身あれば。帰って来れり。累ゝ
何処ふさるゝ。ぞとゝえまゝとゝいば。夫婦のりの救同頭を接ぜられ。とよその夕
ゆり。ゆ出るも面ゆれど。累は昨夜初更のとろまで。ろ女児等績ろうとも。庖湯ふ
抜び居ゝりしがいろふちろん。地炕の中ふ伏びゝ入って。左の足炙焼爛く。剥爺さうち
うへせ。祖ふ。熱湯漬ってと。面より脳のあるうまで。湯ふれふ腫あがり。きゞ息

絶ゝるを引出し。直ふ醫師を招ぜく。抱ゝを喝ちうぶやうやく息あるに。夫
夜中ふ及て目睡ぬ。ちゝふいと怪しゝ。天明く。累が起出るゝ。火傷ふ
一夜の中ふ痂く。一滴の膿水も出ねど。左の足さく。蹇く。面影いちぢやうも似ず。
ゝまく預ゝる稚児を。等閑ふせうと思られんも脳ゝ。れどゝぶ児より意
信ゆふ拒せうを。神佛をちうゝやめ。宜ふ思ひけゝる過あり。ゆ出えゆくと
いふ清三郎が妻禊を出。押ひゝて。ゝ累と。ぶもふ。ゝと憑て
支出ゝう。左ふいちち経ゝてこれを。ゝ累ふ。ゝも美ゝうるゝ女児の片目ゆ
盲て牡蠟といふのを押当ゝるゝ。膚ゝとべく赤松の幹ゝて。左の足短う
ゝ。その容夜又ふ異ゝうゝぶとも醜ゝて。墨田川の水中ふ投れゝ。
醜婦の面影ふつも違ゝぶ。ゝも累が。地炕ふ轉入ゝうとふ時刻を考ふ入ゝ件
の川を渡ゝて。ゝ及ゝう。ゝその彼醜婦の寃魂ゝ児ふ貴縁て辛ゝめえゝ

夜叉のうさ濁
与左衛門

ろさね
村長清三郎
清三郎妻

ふて。人の歎くもさやうはことわるふ。今さらふ物のおそろしくはあれど明日
ぐらうべたるあるべし。故国太息うたて。清三郎夫婦ふ對ひ云ふ。累がかくあり
さるは。命運の法りもとうふて。人を恨るふ一生廢人となり果てき。
親の身ゆゑふ。彼ゞ死まるふ勝まりさのみ階結ぬ人をと信ぜらるゝを夫
婦いとく面のをふかえ。かくと与れるその夜いとふ止宿しく。次の日羽生村ふ立
ちり。舊の家をうれたもうひるどまるふ。清三郎ハ累を送て来く。下郎ふ火を打セ
水を汲ど志ゞ薪水の勞我助るふ。二三日を経くて住つれり。近隣の老弱
らの形勢をえさく。彼愚者。曩ふ妻敵撃ざる間ハ。拙言てふ〻と云ざるうるとよ何の志
いどさるもあくと所容こと帰て来れる面の皮の厚さうて幾ぬ抑ふたゞ悪報ハ
まことふ説いでふ果竟権ふ衆玉芝ホがうふ又いつるまでのあるべし次の巻ふ解分るふてもしむ。

新累解脱物語巻之二　終